

# Newsletter

JANUARY 2001

http://www.aack.or.jp

目次

紀行	タアパカ火山(五八二四メートル)登頂とチリーの登山事情	中島 道郎	1
	「西大嶺」登山記 「中」	森本陸世君不慮の死前後	
	本多 勝一		3
第四回	岡山の山を登る会	川崎 徹	4
山岳研究	山スキー、最新道具事情	高尾 文雄	5
	教育的登山論シリーズ	中島 道郎	6
第三章	登山べからず十訓		
梅里雪山報告	今夏の明永氷河における		
	収容作業について		7
追悼	安田 武先生 ゴアテックスとフ		
	ールドテスト	横山宏太郎	8
お知らせ	AA&E映像記録調査その後	平井 一正	10
	ニュースレター編集長専集		
会員情報	関東新年の会案内		10
	著書紹介		11
	関係団体行事カレンダー		12

## タアパカ火山(五八二四メートル)登頂とチリーの登山事情

中島 道郎

先日の十月一日、チリーのアリカ(Arica, Chile)で開催された『第四回登山と高所環境生理学に関する国際会議』(その第三回は一昨年の松本で筆者が主宰した)に参加したついでに、その会のエキスカージョンに加わって、海拔五八二四メートルの火山、タアパカ(Taapaca)峰に登ってきたので報告する。

この国の観光資源はすべてペルー・ボリビア・アルゼンチンとの国境付近にあり、従って観光行政上、国境付近を外国人立入禁止地域とするわけにゆかず、さりとて、観光ならば外国人の出入りは自由、とするのも困る。そこで考えたのが、軍そのものが観光業者になる、という案

で、そうすれば観光客は管理できるし、外貨はたんまり稼ぐことができ、一石二鳥である。というわけで、そこに、観光客を誘致するのは「三三ENTEL」という会社、実際の運営は軍、という業態が成立しているように見受けられた。ただしこれはチリー北部の一部的な事情かもしれない。

アリカはペルー国境に二〇キロメートルというチリー北端にある古い歴史の港町で、その医療技術大学が国際会議の会場に選ばれた。昔こはボリビア領で、同国唯一の海港であったが、一八八二年の戦いでチリーに敗れたため、以後ボリビアは内陸に閉じ込められてしまい、貧しい国のまま現在に至っている。エキスカージョン対象のタアパカ火山はアリカの東北一〇〇キロメートルにあり、さらに東行五〇キロメートルで世界一高い湖、チュンガラ湖(Lago Chungara, 海拔四五〇〇メートル)に至る。湖は、北側に富士山そっくりのバリナコタ峰(Parracota, 六三三〇メートル)、東側にキシキシニ峰(Quisquisini, 五五一メートル)、そして同峰の左にはボリビアの最高峰サハマ峰(Sajama, 六五〇三メートル)などが取巻いていて、それは見事な景色である。

さて、エキスカージョンに参加したのは私を含めて七人。四十代のイタリアの女医さんのほかは皆二十代であった。十月四日、学会場から軍のバスで一旦チュンガラ湖に登り観光した後、引き返して海拔三六〇〇メートルのプトレ(Pute)駐屯地まで下って、その陸軍病院に泊め

て貰った。陸軍病院というものは一旦緩急を想定して作られてあり、平素は患者がいなくてガラガラである。それを観光客に提供すれば、遊休施設の有効利用となり、これまた一石二鳥である。またこういう、一旦四五〇メートルに上がってから三六〇メートルに降りて泊まるという方式は、高山病予防のセオリーに叶っており、合理的である。因みにダイアモックスであるが、筆者の場合、二五〇ミリグラム錠一錠づつ十月四日から六日まで三日間毎朝服用した。

翌五日、朝食後、われわれの世話係グテレス中尉に引率され、トラックで四〇〇メートル付近まで上がり、そのあたりを三時間ばかりトレッキングした。皆足が速かったが、何とかついてゆけたので、この分なら行けそうだという自信がついた。その夜、登山装備の貸与があつた。軍は希望の装備を何でもただで貸与してくれる。だからこの国では、日本から何の準備もして来なくても登山は可能である。私はアイゼンと二本杖を借りたが、そのアイゼンは、筆者が三年前エベレストで使つたのと同じ形式のサレフで、当時はこれが最新式だったのだ、と説明すると、若い連中は非常に喜んだ。またこの二本杖というのは伸縮自在型のスキー杖のことで、筆者はこれの普及に一役買って来た経緯があるが、これを自分が実際に登山に使うのは実はこれが初めてである。

明けて六日、午前三時起床、四時トラックで出発、四五〇メートル地点で下車、五時

登山開始。ところが、昨日よりも高度が上がったせいか、富士山程度の緩斜面なのに、なかなか皆のペースについてゆけない。十一時、五四〇メートル地点に弁当・水・カメラ等殆どの物をデポする。ここから先は雪田となる。このあたりは雨が全く降らない極端な乾燥地帯である。すると雪は融けないで直接水蒸気になる。すなわち昇華である。そうすると雪面は平らにならず楢の歯状の小セラック群となる。この楢の歯の上を渡りながら登攀するので、これに苦勞した。この場合二本杖は実に威力で、これなしではとても登れたものではない。その効用を改めて実感した次第である。またピッケルは全く不用であつた。

午後三時十五分、山稜に立つ。やれ頂上だ、と思つたらそこに中尉が待つていて、ドクタ―、あと高度差二〇メートル、という。遙か長い稜線の果てに国旗がはためいているのが見える。フーッ、あそこが三角点か。中尉が荷物を持つてくれる。空身になつても足がなかなか進まない。先行していた若い仲間達がわざと歩度を落として私の通過を待つていてくれる。有難う。三時四五分、着いた。頂上五八二四メートル。グラスエス―グラスエス―岩陰に風をよけて待つていてくれた若者達がいる、わざと道を先に譲つてくれた若者達もいる、それら同行者一人ひとりに感謝の言葉を述べる。中尉が持参の軍のベレー帽を私の頭に載せてくれる。記念に持つて帰れと言う。ではこれを被つて皆と記念写真を撮らう。しまった―日章旗もAACK旗も持参して

こなかつた。何たる不覚！

午後四時十五分、もう一刻も猶予ならぬ。さあ急げ、日の暮れないうちに降りきつてしまわなきゃ足許が危ない！下りルートは登りと全く違ふ。楢の歯雪を蹴散らしながら真直ぐに下る。だが下りでもなかなか進まない。腹はペコペコ、口はカラカラ。気がついてみれば、午前三時の朝食以後は殆ど飲まず・食わずだったのだ。雪が切れると砂走り道になる。六時四五分、日は太平洋のかなたに沈む。いやあ、この夕日の見事さはどうだ。地平線のすぐ上は光の無い紺色の帯、その上は輝く茜色の帯、それが天空に向かつて黄金色に次第に薄れていつている。こんな夕暮れはこれまで見たことが無い。さあどんどん暗くなつてゆく。いよいよ足許が危なくなつてきた。急げ、急げ、護衛の兵隊さんが荷物を持つてくれる。でも、それが誰だかもうわからない。七時四五分、氣息奄々としてクルマにたどり着く。改めてまた皆にグラスエス。八時三〇分ブトレ駐屯地帰着。借りた装備を返し、預けてあつた荷物を受け取り、中尉に礼を述べたりした後、九時半発の軍の定期バスで送られてアリカ市のホテルに帰り着いたのは十月七日午前零時。寝たのが午前一時。なんと、この日は朝の三時から通算二十二時間も行動したのであつた。妙なことに、あれほど氣息奄々としてクルマにたどり着いた筈なのに、八時間後に目覚めてみると、疲労感は一切残つていなかった。これはシシャパンマの時もそうであつた。高所での行動は、数歩進んで

は立ち止まり何回かの深呼吸、の繰り返しで、つまり休み休みの行動なので、肉体的には全く疲れないのである。だから、その日の午後零時半の飛行機で首都のサンチャゴに飛び、翌日一日首都観光の後、ダラス経由で二七時間かけて十月十日夕方関空に帰り着いたが、翌日からもう通常勤務につくことが出来たほどの楽な山旅であった。

以上の要約。

(一) この国は、全く登山の用意なしで行っても登山は出来る。

(二) 申し込み窓口は「ENTEL」、実際はチリ陸軍が一切世話する。

(三) 因みに上記の登山料は、チュンガラ湖観光も含めて、US\$110(約13000円)也。

(四) この国は山頂での国旗掲揚が慣例。登山には必ず日章旗とAACK旗を持参する。

[註] 1111 ENTTEL : www.entelchile.net

(十一月四日受領)

## 西大嶺登山記(中) 森本陸世君不慮の死前後

本多 勝一

リフトの終点は標高約一六〇〇メートルなので、西大嶺(標高一九八一メートル)までの高度差は四〇〇メートル弱、ゆっくり登っても二時間くらいであろう。好天ならば約一

五キロメートル先の西吾妻山(標高二〇三五メートル)へ往復する余裕は十分にある。

モミ類(たぶんアオモリトドマツ)の中にときどきダケカンバのまじる林には、すでに何人が登ったシユプールがあり、傾斜もきつくないので、今年最初の登山ながらあまりしんどくはない。風もほとんどないので、針葉樹林の枝に振りつもっている雪も落ちていない。

次第に樹高が低くなり、樹間もひろくなって、中ノ沢源流の谷こしに西吾妻山の斜面が見える。薄くもりながら、さいわい雪はまだ降りだしそうにない。適度な配置の林間の、新雪にすべてが覆われた風景は、いつ来ても青春時代につれもどしてくるような気がする。そういうば、満年齢なら六八歳になったとはいえ、数えどしだと今年はずでに「古稀(七〇歳)なのだ!」(古稀は数えどしで言うことになっている。)つまりこれは古稀登山第一回目というわけです。

先導のシユプールにしたがって、中ノ沢側の広い斜面をトラバースぎみに登ると、まもなく広くてゆるい雪原に出た。あとは頂上までつづく緩斜面である。しかし足元の雪は少し堅くなり、風も出てきた。

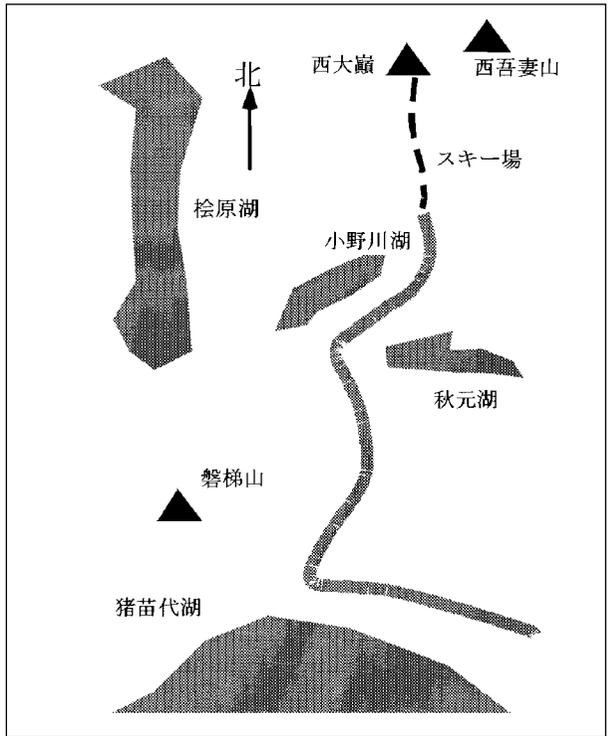
頂上についたのは午前十一時前後であった。「最長老」たる殿の私がついたのは同十一時十五分ごろだ。少し頭を出している三角点の石柱を前に記念写真。しかし残念ながら、頭上の雲は厚みを増して暗くなり、めざす西吾妻山の方はすでに雪でけぶりはじめている

様子である。今回はここであきらめて下るとしよう。森本君も調子がよければゲレンデに出てきているかもしれないし……。

それでは、例によってスキー登山最高のひととき、歓声とともに滑降開始だ。前方には雲の下に松原湖をかこむ山々。理想的な広い斜面の新雪に、好き勝手な弧をえがいて、もつたいないような短い時間で森林帯にはいつてしまふ。処女雪(なんて表現は、最近は何シカランのだらうか)も二月だとまだ軽くて、ゲレンデのように抵抗が少ない。

広い斜面を選んで、登りのルートよりも右(西)寄り滑ったところ、森林帯の中の雪積が異常なまでに乱れている斜面にはいりこんだ。タンネ(モミ類)のまわりで風が渦巻いたりして雪がとばされ、それが風下側に高く積もったりすると、雪の浅い所と深い所の差が三メートル以上の壁になるのだ。うっかりすると壁から墜落しかねない。意外な障害物に悩まされたものの、そんな部分はあまり長くつつかず、まもなく「普通の」林間滑降となった。

スキーにまじって雪上板(スノーボード)のシユプールもある。森林帯の中でこれは少々驚きだ。雪上板は登りにスキーのような役には立たないから、山スキーには無理だと思っていた。しかし二石井スポーツ本店の土屋芳昭氏によると、最近では登り用の雪上板も作られていて、登りには板が半分分割してシールをつけることができるそうだ。雪上板で滑るためには万難を排して山頂まで登る若



者がいるかわり、ゴミには無神経、自然保護にも鈍感な例が少なくないとか。「山スキー」とは別のスポーツになってきているみたいね。登山としての岩登りとは別の、カベでさえあればいいスポーツみたい。それに雪上板の事故はスキーより何倍も多く、手首の骨折が多いのが特徴らしい。

ところで、好き勝手に滑るうちに他の三人を見失ってしまった。呼んでも応答がない。たぶん私が一番あとということがあるまい、としばらく待ってからまた呼んだが、やはり深閑としている。シュプールはいくつかあるが、これは仲間のものとは限らない。まあ迷って遭難するような奴はだれもないし、ともかくリフトの終点たる登り口まで行って待

とう。……と、思っただけに滑り下りたところ、なーんだ、登り口にみんなもう集まって昼飯の弁当を食べているのであった。

まだ時間は早いし、雪の降り具合も下の方だと大したことではないので、ゲレンデでもひと滑りしようと、私たちはリフトに二回乗った。森本君は来ているらしく、姿をだれも見かけなかった。それでは帰るとしよう。駐車場にもどって伊藤君の車に四人とも乗り、民宿（ペンション）の「豆わらじ」に着いたのは午後一時ごろだった。森本君は休んだままで、一階にはおりてきていないようだ。帰り支度をすべく、それぞれの部屋にもどる。私も自分の「小豆」部屋で支度をしていた。

一二月二五日受理

(つづく)

#### 第四回 岡山の山を登る会

川崎 徹

高村デルファが企画し、AACK、笹ヶ峰会の有志とその夫人による岡山県北部にある那岐山の日帰り登山から始まったこの会は、第二回から、初日は一〇〇〇メートル前後の山、温泉に宿泊し、二日目は一〇〇〇メートル

ルを越える少し高い山に登る、というパターンが定着した。

第四回となる今年も、十月二十八日、二十九日、ぶな林の紅葉の時期を迎えた蒜山高原にある仏ヶ仙（七四四メートル）、上蒜山（一二〇二メートル）登山を行った。回を重ねることに参加者が増え、今回は十七名が参加した。前から参加していた。広瀬、平井、寺本、酒井、高村、新井、新井夫人、潮崎、川嶋、川崎に加え、新たに京都から左右田、谷、上尾、大津から原田、神戸から松井、米子からは藪内、広島から内山が加わり、卒業以来初めて顔を合わす人も多く、初対面のように、改めて挨拶をするシーンも見られた。

初日の二十八日、集合場所の蒜山高原SAは小雨が降りしきっていた。雨中の登山はまだ致し方ないとしても、雨中の昼食は頂けない、不安がよぎる。ただ、登山口のある八束村のピンポイント天気予報は、十五時まで曇りだったので、その予報に期待した。七台の車を連ねて、八束村にある快湯館駐車場に着き、登山準備をしていると、雨はだんだん小降りになり、やがて上がった。ピンポイント予報は正しかった。

四台の車に分乗して、仏ヶ仙（七四四メートル）の登山口に向かう。この山は以前高村等が今西錦司先生健在なりし頃、一緒に登った山である。十二時四五分出発、一ピッチで十三時十五分には頂上に着いた。この山頂は高度はないが、一等三角点、中央分水嶺、県境の三冠王である。今西先生が登山対象に選

んだだけのことはある。南側、西側は樹木に遮られて展望はきかないが、北側は広く開けていて、鳥取平野のかなたに日本海が霞んでいた。まず今西先生を偲びながら、全員でヤッホーを斉唱する。そのあとはドイツ語も飛び交うにぎやかな昼食となり、十四時三〇分下山した。

旅館に入るには早すぎたので、中蒜山の塩釜冷泉を見学後、十六時三〇分湯原温泉にある国民宿舎「桃李荘」に着いた。夕食後、部屋に帰り酒を酌み交わしているとき、寺本シヨーチャンが、現役時代に歌っていたベルケオのドイツ語歌詞の疑問点を提起した。碩学達からいろいろの意見が百出したが、結局、先輩達から受け継いだドイツ語歌詞は意味不明、いいかげんなドイツ語歌詞であるという結論に落ち着いた。

二十九日、二日目も朝起きると小雨がしとしと降っていた。とにかく登山口まで行って様子を見ようと、八時三〇分「桃李荘」を出発し、九時三〇分上蒜山登山口に着いた。この日も幸運の女神がわれわれに味方し、その頃雨は殆ど上がっていた。

喜び勇んで直ちに出發したが、雨でぬかるんだ道は歩きにくい。しかも三合目までは直登に近い急な階段である。息を切らせながら滑りやすい階段を登る。小休止するたびに、チョコレートやお菓子が誰からとなく回され、まるで立食パーティーのような雰囲気、誰かが出發をうながさなければ、何時間でも駄弁っているのではないか、

と思われるほどであった。

十一時一〇分八合目槍ヶ峰到着、天候が良ければ蒜山高原が一望できて、すばらしい眺望を楽しめるのだが、周囲は一面にガスがかかっている何も見えない。上蒜山頂上は十七名が昼食するには狭いので、ザックを八合目に置き頂上を目指す。十一時四〇分二二〇メートルの頂上到着。記念撮影の後、早々に頂上を後にした。

八合目まで下りてきたとき丁度十二時で、正午を告げる鐘やサイレンの音がガスの中を蒜山高原から湧き上がってきた。例によってにぎやかな昼食をしているうちに、ガスが少しずつ切れてきて、中蒜山の山容、谷間のぶな林の紅葉が見渡せるようになっていた。十二時四五分下山をはじめたが、予想どおり、ぬかるんだ登山道は滑りやすく、滑って尻餅をつくシーンが何度も見られた。

十三時五〇分全員無事下山。しかし、靴やスパッツは泥だらけだ。登山口に算があり、おまけに藁束が置いてあって、泥だらけの靴を洗えたのはありがたかった。十五時、海湯館駐車場に着き、蒜山高原ウオークの観光バス二台も入っていて大混雑の快湯館で汗を流し、十六時頃順次帰途についた。

十月二十八日、二十九日の二日間、一度も太陽が顔を見せたことはなく、天候には恵まれなかったが、幸運にも、登山中雨に降られることなく、予定どおり今年の「岡山の

山を登る会」を行うことができた。それにもまして、卒業以来初めて会うという初参加の人も多くいたため、数十年のタイムトネルを抜けて、学生時代に帰ったような楽しさを味わった山行であった。

(十一月二十八日受理)

## 山スキー、最新道具事情

高尾 文雄

山スキーの道具の件について私見を述べます。

### 山スキーの道具

山スキーは最近道具の進歩等により、かなり色々楽しみ方の出来るジャンルとなった。過激な険しい斜面での滑りを目指すものから、軽い雪上散歩まで幅が広がってきた。ここでは滑りに重点を置いた最近の山スキー道具について私なりの意見を述べる。みなさんの道具選びのお役に立てば幸いです。

### スキー

ここ数年スキー界を席卷しているカービングスキーが良いと思います。新雪や悪雪に強く、回転しやすく、リカバリーもしやすい。短くてもずれないので安定してスピードが出せる。トップ幅は一〇〇ミリ程度のもので、身長と同じか少し短い長さが適

当。トップは軟らかく、テールが堅く、剛性の強いスキーを選ぶ。特にねじれ剛性が従来のスキーよりも要求される。ボックス構造やチューブ構造が剛性が強い。回転の仕方が従来のスキーとは違ってくるのでゲレンデの練習が必要。

## シール

張り付けシールは当然であるが、カービングスキーの場合は板の形がひょうたん型になっているので、シールもその形に合わせないと斜登行したときにシールが効かない。一番幅が広いトップに合わせた幅のシールを買い、形に添って余分なところを切り落とす。エッジを出すため少し内側までカットすることに注意。

## スキー兼用靴

滑りに重点を置くのであれば堅い靴が良いが、歩きづらい。滑り中心であればスカルパデナリ。歩きを中心に考えるのであれば、軟らかく軽い靴が良い。ダイナフィット、ノルディカTR-1、2。歩き易さと滑りの両方を求めるのであれば、多少中途半端になる。ノルディカTR-10、ローバ。すべてを満足する靴は今のところ無いので、自分の滑りや指向に合わせる。

## ビンディング

セーフティーを重視しないと思わぬけがをします。一番優れているのはフリッチ デイ

アミールです。

前後にセーフティーが付いていて、調整もできる。登行サポーターも多段付いていて、付属品でクトー(スキーアイゼン)、スキーブレーキ(ストッパー)も付けられる。エメリーエナジーもなかなか良いが、プレートがプラスチックで耐久性に疑問がある。プレートが軟らかいのでラッセル時に外れることがある。メリットはプランコ式でパネが付いていないので登りのエネルギーがセーフでできる。ジルプレッタは#四〇〇もイージーゴーも開放機構が不十分で縦走では使えるが、滑りが中心の山行には向かない。ビンディングの開放強度の調整は必ずやる。初めは少し甘めにして、簡単に外れるのであれば次第に強くして調整する。時々不具合がないか確かめる。

## 安全のために必要な道具

スコップ・冬山個人装備になってきているスコップだが、山スキーの場合は特に必需品である。雪崩で埋まったとき、ピバーク用の半雪洞を掘るとき、新雪の中でスキーが外れて埋まったとき等使い道は様々。コンパクトで軽いものが出ている。ブラックダイヤモンドが良いが少々重い。プラスチック製は堅い雪にはねかえされるものがあるので注意(オルトボックス)。ソングテック・雪崩で埋まったときの初期捜索で役立つ。長さもいろいろあるが、初期捜索が目的なのであまり長いものはいらない。ピーコン・雪崩で埋まった人を探す場合の必需品。受発信のできるものを選

ぶ。オルトボックス、アルペンピーコンが一般的。捜索時にLEDと音の強弱で探せるものがベスト。

(平成十二年十一月受理)

## 教育的登山論シリーズ

中島道郎

### 第三章 登山べからず十訓

前々回と前回の二回は、安全に登山するためにはこうしなさいという話でした。今回は反対に、こういうことはしてはいけません、という話です。なお前二回は外国での定説を紹介したもので私の意見ではありませんでしたが、今回は私個人の考えで述べてみます。

(一) 無計画に登山するべからず。

思いつきで、行き当たりばったり山に登ってはならない。あらかじめ本や地図で自分の実力で登れるかどうかを確かめてから出かけること。また簡単な行動計画書を家に置いて出かける癖をつけることが大切である。

(二) 『登山必携十品』を忘れるべからず。

これは前回に載せた次の十品のことである。

- (一) 懐中電灯、(二) 地図、(三) 磁石、(四) 予備食、(五) 予備衣料品、(六) サングラス、(七) 救急医療キット、(八) ポケットナイフ、(九) マッチ、(十) 火付け材料

(三) 雨と寒さの構えを怠るべからず。

山は気流が複雑なので、天気予報が当たらない場合が少なくない。予報では晴、となつていても決して油断はならない。また山は高度一〇〇メートルにつき気温は〇六度下がることをよくよく承知おきのこと。

(四) 肌着に木綿を愛用するべからず。

普段の生活には木綿が最良とされているが、山での肌着には、真夏の日帰り低山登山を除いて、ポリエステルとかタクロンなど、繊維の間に汗を蓄えず水蒸気として通過させてしまう化繊の方が適している。積雪期登山の場合はやはりウールがベターである。

(五) 新品登山靴でいきなり登るべからず。

しばらく足になじませてからにしないとマメが出来る危険性が非常に高い。

(六) 水筒を軽視するべからず。

水分は三〇分から一時間ごとに少しづつ何遍にも分けて飲むのがよく、水場に来た時だけまとめてどっさり飲むのはよくない。また山水はきれいそうに見えても病原菌や寄生虫の危険性が非常に高いので、正真正銘の湧水泉の水以外は飲んでほならない。

(七) 荷物は重くするべからず。

必要最小限の品物以外は持たない。それに『経験』がものを言う。登山の入門書なども参考にしながら、毎回要った物と要らなかつた物の検討の積み重ねが大切である。

(八) 下り道は走るべからず。

下り道は膝関節にとつて大きな負担になる。まして走って下りる時の衝撃は予想をはるかに越える。一旦受けた膝の障害はもう治

らない。そういうことにならないよう、絶対に下り道は走ってはならない。

(九) 道に迷って行暮れたら動くべからず。

特に寒い季節はそうである。なるべく風の当たらないところを選んで露営しよう。下に木の枝や草を敷き、上にツエルトとかシートを被ります。乾いた肌着に着替え、持っているだけの衣服を身につける。蠟燭の火に金属食器に入れた水をかざして湯を作つて飲む。こうして体を暖めながらなるべく眠るようにする。今どき眠つたらそのまま凍死すると信じている人はあるまい。夜が明けて、道が分かれば行動開始するが、分からないときは出来るだけ体力を温存しつつ救援隊を待つのが賢明である。

(十) 自然を破壊するべからず。

高山植物はもちろん、その辺の野の草花でも手折つたり持ち帰つたりしないように。また、プラスチック製品は当然のこと、食料の残りや包装紙なども全部持ち帰ること。

## 今夏の明永氷河における 収容作業について

事務局

第二次梅里雪山峰登山隊の明永氷河における収容作業について報告いたします。前回の報告でお伝えしたとおり、今年も現地での常駐体制を取らずに、明永村住民の方に定期的な現場パトロールを依頼して発見に努めてい

ます。八月末に新たな遺体と遺品を発見、収容することができました。その経緯は次の通りです。

八月二六日、明永パトロール団が明永氷河上で二つの遺体を発見しました。その報は昆明の雲南体育運動委員会、張俊氏を通じてACKに伝えられ、収容作業のために日本からの人員の派遣要請がありました。これを受けて会員牛田一成さんが九月一〇日に関空から日本を発ち、現場へ向かいました。

九月十二日に牛田さんと現地明永村村長などが明永氷河の現場へ到着し、周辺を捜索しました。その結果、全部で四つの遺体といくつかの遺品が収容され、遺体の一人は広瀬頭隊員であることが確認されました。広瀬君はシュラフに入った状態で発見され、遺体が着ていたオーバースポンのポケットの中のオーバースポンの袋の記名と、村上製の登山靴のインナーシューズの特徴から、身元が確認されました。残る遺体は、ひとつが日本人らしい上肢の一部、残りの二つが身元不明の足の一部でした。発見場所はいずれも標高三五〇〇メートル弱の位置で、昨年の発見場所とほぼ同じ位置です。遺品も含めた全体の発見範囲は昨年より下流側に移り、末端は下のセラック帯についています。

その他に見つかった遺品は、井上隊長の手帳、清水ドクターの医学書、聴診器、装備袋、宗森隊員のオーバースポンス、笹倉隊員の手帳と耳あてなどです。収容された遺体は九月十五日に雲南の大理で茶毘に付され、遺品と共

に牛田さんの手で日本へ運ばれて、九月十七日に関西空港へ迎えに来られたご家族の元へ帰りました。

また、今回の収容作業中に牛田さんが現地連絡官とこれまでに収容された全ての遺体について整理をしている中で、一九九八年八月に見つかって身元不明とされていた日本人の遺体が笹倉俊一隊員であることが分かりました。当時、笹倉隊員の手帳が同時に見つかりましたが、これは手帳だけが単独で見つかったものとされていたのが、現地連絡官が遺体のポケットから取り出して遺品の整理袋に入れたものであって、その手帳を持っていた遺体が笹倉君であることが判明したものです。

この結果、これまでに日本隊員八名、中国隊員五名の身元が分かり、遺体が確認されていない隊員は、清水久信ドクター、船原尚武隊員、斯那次里隊員の三名となりました。また、現地での収容作業とは別に、九月三日にACKホームページのアドレスへ一通の電子メールが届き、梅里雪山峰隊員のものと思われる船原の名前が書かれた手帳・カメラなどの遺品を保管しているので連絡を欲しい、と伝えてきました。この遺品発見の報は九月五日に上海地元の新聞記事に載り、追って日本でも報道されました。このメールの送り主はAgence France-Presse上海支局の現地カメラマンである劉瑾氏で、直ぐに劉氏と連絡を取り、船原隊員のご両親と会員岩坪五郎さんが同行して九月十三

日に上海へ行き、本人に会って直接、遺品を受け取り、日本へ持ち帰りました。

以上が今年のこれまでの収容作業の経過です。現地パトリールはその後も続けられており、細々とした遺品は見つかっていますが、新たな身元の分かる遺体の発見はありません。十月八日には会員小林尚礼さんが、今年最後のパトリールに同行するため昆明に向かいました。

小林さんには十月十五日まで広瀬隊員、工藤隊員のご家族が同行され、明永村を訪問されています。

十月十九日に小林さんと現地住民で氷河を探索し、衣類などについている遺骨と、細かな遺品が見つかっています。小林さんは十二月下旬に帰国の予定ですが、可能であればもう一度、氷河を探索する予定でいます。

(文責：事務局 吹田啓一郎、平成十二年十二月受理)

## 追悼・安田 武先生 ゴアテック クスとフィールドテスト

横山宏太郎

安田 武先生は、一九九九年十月に逝去された。ご生前の功績が高く評価され、同月に九日、正五位 勲三等瑞宝章の榮譽を受けられたことはたいへん喜ばしい。しかし、長年勤務された武庫川女子大学を退職

された後も、研究に、教育に、登山に、ますます高い意欲を持ち続けておられた先生にとつては、あまりに早すぎたご逝去といふか言い様がない。まことに残念なことである。

さて、よく知られているとおり、ACKにおいて安田先生は、登山装備、特に繊維装備の開発改良を通じて、サルトリカシリ隊をはじめ多くの登山隊の成功と安全に大きく貢献された。また、ACKや京都大学関係だけにとどまらず、一九七〇年の日本山岳会エベレスト登山隊でも繊維装備の開発を担当された。私は一九八二年から六年半、武庫川女子大学家政学部被服学科の安田先生の下で、この分野のお手伝いもしながらたいへんお世話になった。先生の業績の全てをご紹介できればよいのだが、残念ながら私には知識・資料が不足している。それは他に適任の方々にお願いとしまして、ここでは上記の期間について私なりに思い出すことを少し記して、追悼としたい。

私にとって先生の下での最初の仕事は、先生が進めておられた透湿・防水機能を併せ持つ素材、「ゴアテックス(薄いゴアテックスフィルムがその機能を持っており、普通はそれを布地と張り合わせたゴアテックスファブリクスが衣類などに使われる)」の評価をお手伝いしたことであった。当時はゴアテックスが先生によって日本に紹介されてまだ間もないころで、雨具にしてもたいへん高価だったが、新しい装備には目が

ない岩坪五郎さんが早速着用されており、周囲は珍しそうに眺めていた。その防水機能の説明として、一般には、「ゴアテックスフィルムにはたくさんの孔があいているが、その大きさは一番小さい雨粒よりも小さいからである」といった説明がされていた頃である。実験では熱心な学生さんの協力もあって、「透湿性」、「防水性」について正しい理解を得るような報告ができたと思っ

ている。その後、先生の研究・啓蒙両面の努力によって、ゴアテックスは登山・スキーなどアウトドア分野を中心に普及していった。スキーウェアとしては、機能性だけでは売れないので一時のブームに終わったが、登山用装備の素材としてはすっかり定着した。また一般の用途にも普及しており、例えば農作業用の雨合羽などにも利用され、従来なおざりにされがちであった作業時の快適性向上に大きく貢献している。

衣類装備の開発をする上では性能評価が必要である。その方法として、素材の評価、衣類としての評価、人工環境での着用実験、実地の着用と様々な段階があるが、特に現場での着用による評価が最も重要である、すなわち「実際に使ってみてよいものが本当によいものだ」というのが先生の考え方であった。ごく当たり前に思えるが実行はかなり難しいこの種の評価を進めることができたのも、先生ならではの考え方。登山などの際に試作中の衣類を自分で着用テ

ストされることも多かった。また、登山隊、調査隊の衣類装備を設計開発し、試作衣類のフィールドテストを隊に委託することもよく行われた。

一九八五年は京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊（京大山岳部、堀了平隊長、筆者・横山も参加）とパタゴニア氷河学術調査隊（文部省、中島暢太郎隊長）が先生の指導の下、ゴアテックスの各種装備を試用した。これには、ジャパンゴアテックス社の多大な協力があったことは言うまでもない。ブータンではゴアテックスの軽登山靴（ゴアテックスフーティ使用、革製）がモンスーンの最中の、まるで泥田のような泥濘の道でも威力を発揮し、ゴアテックス雨具との併用で隊員は上体から足先まで快適にキャラバンを続けた。また、ゴアテックス製のウインドヤッケ・オーバーズボンも高所で活躍した。ウインドヤッケのデザインは、「一沢帆布製と同じに」と、横山が京大山岳部時代に使っていたものを見本につけて注文したのだが、フードだけが小さめに出来上がった。一見したところあまりに大きいフードに作る側がびっくりして修正したのではないかと、思っている。次の機会にはさらに念を押して、ちゃんと大きいフードにしてもらった。一方かのシフトンが「嵐の大地」と呼んだパタゴニアでも、悪天候の中ゴアテックスの装備類は大いに役立った。ある時は浸水してきたテントの中で、隊員はゴアテックス製シュラフカバ

ーにはいつて半分浮いていたという。両隊ともゴアテックス装備の高機能にも支えられ、大きな成果を上げ無事帰国した。

「レイヤードシステム」の重要性を説かれたのもこのころではなかったかと思う。衣類はふつう一枚で着るわけではなく、何枚かを重ねて着る。一枚のウェアとして優れた性能を持っていても組み合わせによってはその性能を発揮しないこともあり得る。従って条件に合わせた正しい重ね着が必要で、性能評価もそれを考慮したものでなければならぬ。フィールドテストの重要性はますます高くなる。

一方では最新の設備の人工気候室での実験も当然実施されていたが、先生にとってフィールドテストの重要性は変わることがなかったし、その結果を、それも追従やおざなりではない、率直な評価を聞くことを大変喜ばれた。テストのための短時間の着用などではなく、例えば登山隊員たちが本場に普段の行動の中で着用してみることが、先生にとつての真剣勝負だったのでないか。故植村直己さんが講演のため武庫川女子大学に來られた折りに、一九七〇年の日本山岳会エベレスト登山隊で支給された安田先生の設計になるウインドヤッケを、ここぞというときには一番信頼できる装備としていつも携行していると話されたときは、先生はこのほかうれしそうだった。極限の環境で活躍した植村さんに信頼されたヤッケは、これ以上ないフィールドテストに

耐えた、先生の記念碑の一つである。

二〇〇〇年三月下旬、例年になく遅くに降った雪の中、先生は、故郷の土に還られたとお聞きした。天気の良い日には立山連峰が連なり、ひととき高く剣岳の聳えるのが望まれる、お気に入りの場所だったそうである。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(十一月十五日受領)

## AAACK映像記録調査その後

平井 一正

先にニュースレター十七号でお願いしましたAAACK探検登山の映像資料の調査については、会員各位のご協力を得て、現在次のようなことがわかりました。まことに残念ですが、現在のところ白頭山<sup>34</sup>やカラフト<sup>40</sup>などのフィルムは行方不明です。会員の方々、特に映像、報道関係のお仕事をされておられる方々のご協力を重ねてお願い申し上げます。

・所在が不明なもの

白頭山<sup>34</sup> カラフト<sup>40</sup> (このほかの際では撮影の有無が不明)

・フィルムまたはビデオの所在が判明したもの(ポナペ島を除いてAAACK倉庫で保管)

ポナペ島<sup>41</sup> (吉良竜夫会員宅) 知床<sup>52</sup>

チヨゴリザ<sup>58</sup> ノシャック<sup>60</sup>

サルトロカソリ<sup>62</sup> ヤルンカン<sup>73</sup>

カンペンチン<sup>82</sup> ナムナニ<sup>85</sup>

マサコン<sup>85</sup> 雲南学術<sup>88</sup>

シシャパンマ<sup>91</sup> メイリ隊<sup>90</sup>

メイリ救援隊<sup>91</sup>

・ビデオはあるが原フィルムの所在が不明なもの

アンナプルナ<sup>53</sup> ガネツシユ<sup>64</sup>

・以下の写真アルバムがAAACK倉庫で保管

三高山岳部アルバム一九二九年頃

北部大興安嶺<sup>42</sup> アルバム 六巻

中部大興安嶺<sup>35</sup> アルバム 一巻

現在この映像記録をどのような形にして保管するか委員会で検討しています。AAACKの歴史として一本のビデオにまとめる案は、経費の関係もあり、今後さらに検討を重ねていくつもりです。さき出版された「ヒマラヤへの道」の姉妹編写真入り冊子の作成やホームページの利用などいろいろ意見が出ています。ご意見があればぜひお聞かせください。

(二月二三日受理)

## ニュースレター編集長募集

事務局

現在の編集長沖津文雄氏は平成一三年八月を以て二年の任期を終える予定です。後任は決まっておらず、編集長の任務を引き継いでいただける方を求めています。

編集長の任務は、会の運営を円滑にするために必要な記事を掲載したニュースレタ

ーを年四回発行することです。記事の割付、印刷のレイアウトなどについては、印刷所が自主的にやってくれています。必要な記事が必要な時間までに集め、印刷所に送ることが編集長の主要な任務となります。編集長の任期は二年です。

自薦他薦で結構です、会の発展のためにぜひご協力ください。

## 会員情報

## 関東新年の会案内

---

日時：二〇〇一年一月二十五日（木）  
十八時三〇分より

場所：新日鐵「代々木クラブ」  
渋谷区代々木三・五九九

電話：〇三三三七〇三二四一  
会費：七〇〇〇円

申し込み・問い合わせ：岩瀬時郎  
電話：〇四三九 五四 二六七六

AACK 関東の山行計画 岩瀬時郎

関東グループの山行計画を作成しました。  
お申し込みを受け付けています。

## 関係団体行事カレンダー（2001年）

日 時	名 称	付 記
1月25日	関東グループ新年の会、代々木クラブ	連絡先：岩瀬時郎、電話0439-54-2676
3月下旬	理事会	議題は2001年度事業計画と予算
5月12日、13日	探検部OB集会	笹ヶ峰ヒュッテ（予）
5月下旬	理事会	議題は2000年度事業報告と決算，役員改選
5月下旬	AACK総会	2000年度事業報告と決算， 2001年度事業計画と予算，役員改選
8月3日～5日	笹ヶ峰会総会・親睦会	総会は4日、第1年度の決算・報告を含めた 案内の文書を春に発送予定です。
8月5日～19日	笹ヶ峰ヒュッテ・夏の開放期間	受付開始6月1日
10月6日～14日	笹ヶ峰ヒュッテ・秋の開放期間	受付開始9月1日

対象峰・クリュチエフスカヤ（四六五〇メートル）、カムチャツカの最高峰）  
日程：七月委二九日（日）より一五日間  
申し込みと問い合わせ：沖津文雄または岩瀬時郎  
その他：玉山登山ならびにその他いろいろ計画しています。

### 著書紹介

#### 編集記にかえて

安仁屋政武著「パタゴニア」古今書院  
定価一万二千元、三四九頁

南緯四五度、局地というほどまでは緯度の高くないこの位置の海水面近くまで、パタゴニア大氷原が広がっている。氷原は南北二つに分かれ、総分布面積は約一千万五千平方キロメートルである。この氷原の氷河が目下激しく溶けつつあり、氷床が溶解し溢れ出る水は地球の海水面を上昇させている。著者の計算によるとその上昇量は、過去五一年間で〇・二センチメートル程度にも達するらしい。

本書は、一九八三年から始まる過去一五年近くにわたる、パタゴニア氷原と著者との関わりをこの一冊に集大成した労作である。氷河学を専攻する著者の対象は、本書においてももちろん氷河であるが、しかしパタゴニアの紀行、著者の研究手法、氷河

についての説明など丁寧に記述されており、本書はパタゴニアの自然や氷河に関する興味深い内容に満ちている。

日ごろ氷河に接することの少ないわれわれにとつて、本書の記述はまことに興味深いものである。ここ一万年ほどの地球温暖化の歴史における三回の寒冷期での氷床範囲の復元など、激しく活動する氷河の実体を読者は詳しく教えられるのである。パタゴニア氷河の歴史は、この大地がダイナミックに活動していることを具体的に示してくれるすぐれたお手本のような。少し高価ではあるが、氷河を知るための格好の教科書である。

最後に付け加えれば、残念なのはこの大著に、当会会員中島暢太郎氏を隊長とする一九六八年のパタゴニア探検が一行しかふれていないことであろうか。

編集委員 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 二〇〇一年一月二〇日

発行所 京都大学学芸部 京都大学学芸部 京都大学学芸部

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所